
とある死神の秩序崩壊

双六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある死神の秩序崩壊

【Nコード】

N16680

【作者名】

双六

【あらすじ】

いい加減な死神のくだらないミスにより、無惨な死を遂げた少年。しかし死神はお詫びに、何処でも好きな世界へ転生させてくれるという。

これは、そんなこんなで転生した少年が、誰かを救うために奔走したりしなかったりする物語です。

主人公チート、不定期投稿、駄文、作者文才皆無など、様々なマイナス要素をもなく許してくれるという、寛大な方以外

が読むのはオススメしません。

く 良い点でも、悪い点でも、遠慮なく御感想をお書き下さい。く

#0「死神って結構いい加減」(前書き)

はいどうもはじめまして、双六と申します

マジで文才皆無ですが、頑張って行くので、
暖かい目で見守っていただけるとありがたい限りです。

#0「死神って結構いい加減」

俺が目を覚ますと、そこは全てが純白で統一された世界。天と地の境すらない。

広い、広すぎる、果たして地球にこんな空間が存在しただろうか。そして、目の前には、漆黒のスーツを纏う青年が、俺と向かい合う形で椅子に腰掛けている。

「やあ、少年、お目覚めかい？」

その黒い青年は俺に問い掛ける。

「…あんたは誰だ？」

「ん、僕？ 僕は、死神だよ」

「死…神……？」

「うん、死神」

自分は死神だと、いともあっさりとそう告げる黒い青年。

「…ここは何処なんだ？」

「うーん、なんて言ったらイイかなあ？」

強いて言うなら、現世と天界の狭間ってトコかな」

「何で俺は生きてんだ、確か俺は…」

そう、俺は死んだのだ、トラックに跳ね飛ばされ、ボロ雑巾の様になった。

最後に見たものは、道端に転がる自分の足。

あんな無惨で悲惨な目に遭って生きているはずがない。

「そうだね、君は厳密に言えば生きてない。天に召される一歩手前だ。」

「どう言う事だ？」

自分が何故そんな状況に陥ったのか、何故死んだはずの自分の意識があるのか、様々な疑問が頭を渦巻く。

「いつや、ゴメンね」

言い難いんだけど、君が死んだのってぶっちゃけ僕のせいなんだよね」

「……は？」

この黒い青年改め、死神曰く、彼のちょっとしたミスで俺の死期が即座に実行されたのだという。

「事務の仕事してたらさ、君の資料にコピーこぼしちゃって。ホントまいったよ」

「まいったよ」じゃねえよ」

到底納得がいかない、こんないい加減な死神のせいで、俺の人生に幕が降ろされたなんて。

「まあまあ、そんなに怒らないでよ。

お詫びに、何処でも好きな世界に転生させてあげるからさ」

「…そんな事できんのか？」

「もちろんっ、これは僕のミスだしね」

戯けた様に両手を広げ、微笑を浮かべる死神。

実際、転生なんてふざけた事が可能らしく、2?程の紙束が手渡される。

「コレなんだ？」

「転生先のリストだよ。

お望みならコース設定なんてのも在るよ」

「どんなのだ？」

「まずAコース、転生させたらその後放つたらかし、自由奔放に生きたい人向け。

これの注意は、一切のサポートが無いって事かな。

次にBコース、転生させた後もサポート満載、慎重堅実に生きたい人向け。

注意は、ずっと監視されてる気分を味わう事になるよ、すぐ慣れると思うけどね。

以上二つです」

死神は、通販の商品を紹介している様な振る舞いで、コースを説明する。

「二つしかねえじゃん……」

「まあ、そう言わずにさあ」

たった二つしかない選択肢を選ばなくてはならない。しかも、どちらもデメリット満載だ。

「決めたかな？」

「……………じゃあ、Bで」

「りょうかい」 申請書取ってくるから、行き先決めといてね」
そう言った瞬間、フツと屋気楼の様に姿を消した。

「（…傍迷惑な死神だな、まったく）」

*

*

*

それから幾分時が経っただろうか、待てど暮らせどあの死神はやって来ない。

「遅せえ…何やってんだあいつは」

ここは昼も夜も無いが、体内時計がもう軽く24時間は過ぎているだろうと示している。

怒りのメーターは振り切る寸前だ。

「おっ待ったせー」
「って危なっ！」

不意に背後に現れた死神に渾身のストレートを放つも、半歩動かれただけでヒョイと躲される。

「いきなり殴ってくる事はないでしょ、こっちにも理由があるんだからさ」

「ほう、じゃあその理由とやらを聞かせて貰おうか」

指をベキベキと鳴らしながら、もしくはならない理由だったら、ボロおれとおなじ雑巾にしてやると心の中で誓う。

「（誰に誓おうか？ よし、悪魔にしよう）」

俺が悪魔との契約を交わそうとしていると、ようやく死神が口を開く。

「いや、実はさあ、総務課の女の子に誘われちゃって断れなくて」

「ぶっ殺す！」

アホ死神に粛清の鉄拳を喰らわせるべく、肉体のリミッターを外し、どっかの一子相伝拳法継承者の様に拳を振るう。

しかしこれもヒョイヒョイト、軽く躲されてしまい、全ての鉄拳が空を切る。

「仮にも神である僕に、一人間が勝てる訳ないでしょ」

「くそっ……」

もうこのアホ死神を殴れないと悟り、やりきれない拳を収める。

「そんな事よりさ、行き先は決めたかい？」

「ああ、とつくな」

正確に言うと、この分厚いリストを5、6回読み返せたがな。

それは脳の隅に追いやり、先ほど渡されたリストの一角を指差す。

「ふーん、ホントにここでいいの？」

意味ありげな笑みを見せ、こちらを見る死神。しかし俺にはその意図が読めない。

「問題ない」

「よし、じゃあ此処にサインしてくれるかな」

契約書の様な物と羽ペンが差し出される。

契約書は見た事のない文字で書かれていて、海外の詐欺っぽい雰囲気だ。

ガリガリ……

「これで良いんだな？」

「パーフェクト♪」

それじゃあ、新しい人生を始める準備はイイかい？」

そう死神がパチンと指を鳴らすと、空間に亀裂が走り一枚の扉が現れた。

どうやらこれが此処の出口らしい。

俺は静かに頷いた。

「それでは、新しい人生へご招待致します」

扉の中は光で満ち溢れていた。俺と死神は光の中に踏み出す。
まだ見ぬ世界への第一歩を。

#0「死神って結構いい加減」(後書き)

どうだったでしょうか？

初投稿＆超初心者なので、至らぬところが在ると思いますが、
どうぞよろしくお願い致します。

感想等を心待ちにしております。

#1「やり直して案外メンドくさい」(前書き)

はいどうもこんばんは

また駄文で申し訳ないですm(_____)m
でも許していただけたら幸いです。

それではどうぞ

#1「やり直して案外メンドくさい」

俺が再び目を覚ますと、そこは見知らぬ天井があつた。

「やあ、お目覚めかい？」

上のほうから死神の声が聞こえる。

どうやら此処は転生後の世界らしい。

だが、何か違和感がある。

「（なんか…縮んでね？）」

自分の手を見ると、目測だが、五センチ弱しかない。

「（ていうか赤ん坊になってるんですけど、何故に？）」

何故か、体は子供、頭脳は大人な少年探偵の様な有様だ。

「ああ、それはね、転生の影響だよ。」

俺の心を読んだ様に、ひょっこりと顔を出す。

「バブブウ（どう言う事だ？）」

「……え？ なに？」

「バビバブバブブウ（だから、どう言う事だって聞いてんだよ）」

「…………いや解らないから…」

多分、赤ん坊になってるから、まだ喋れないんじゃない？
だから、頭の中で考えるだけでイイよ。読心術使えるし」

「（ああ、そうする）」

面倒だな、知識はあるのに喋れないなんて。もどかしい気分だ。
まあ、ずっとバブバブ言ってるよりはマシだな。

「えーと、詳しく説明すると、転生は死んだ時の姿のままでできる
訳じゃないんだ。言うの忘れてたけど」

「（忘れんじゃねえよ。お陰で戸惑っちゃっただろ）」

「いやゝゴメンゴメン」

頭を掻きながら誤ってきた死神。

まあ、一応誤ってきたので許してやろう、と寛大な俺は思った。

「…それも全部聞こえてるんだけどね。

まあいいや、それで続きなんだけど、これから君の世話は僕がする
事になるんだ。」

「（いや、それも初耳なんだが）」

「うん、これも言ってたからね」

「ビバビバブバビブ！（開き直んじゃねえよ！）」

「は、ははは…」

ふざけた発言にバブバブ叫ぶ俺。

そして、引きつった様に苦笑いする死神は、更にこう続ける。

「で、これからまた君は十六年間の間、前の状態まで身体が成長するのを待つ。

そしたら君の希望した世界、つまり『とある魔術の禁書目録』の世界に飛び入り参加してもらうんだ」

「（もしかして、その十六年間ずっとお前と一緒にして訳？）」

「うーん、十六年間でいうか、一生だね」

「バブ？（なに？）」

衝撃のトンデモ発言を耳にして、半ば放心状態に陥る俺。

「今僕と君は持ちつ持たれつな関係だからね。

さっき書いた契約書の内容は、僕は君の生命力を自動的に得られ続ける代わりに、君と契約を交わし、能力を共有して、なおかつ、君が死ねば僕も死ぬし、僕が死ねば君も死ぬと言う物だ」

「（つまり、俺たちは互いに離れられないと）」

どうやら、あの契約書は結構とんでもない代物だったみたいだ。先に言えやボケ、と思わずにいられない。

「そう言う事になるね。難儀な話だよ。

あ、契約の証は左胸に在る刻印だから、一応言っとくね。後から言っと、君が口煩そうだし」

死神はそう言うのと、やれやれと言った表情で首を左右に振っていた。

「（生命力ってのは？）」

「ああ、それはただ君に二人分の疲労感が在るっただけだよ。
例えば、僕が走っているのに、代わりに君が疲れるって感じかな」

「（そうかそれならいいんだ）」

内心、寿命が縮んだりするんだろうかと、心配していたので、安堵の息を吐く。

もう契約してしまった物は仕方ない。どうせこの手の物は途中破棄なんてできる訳無いし。

「（もう他に何か無いか？ 言っておかなくちゃならん事は）」

「もう無いかな…多分」

クソいい加減な死神は、またも曖昧な事を抜かしやがる。
何かもうどうでも良くなってきた…

「ま、まあ、とりあえずこれからよろしく」

「バブ、（ああ、）」

差し出された死神の手を、小さい手で力強く握り返す。

まあ折角の新しい世界だし、頑張ってエンジョイしてみるか。

#1「やり直して案外メンドくさい」(後書き)

どのような内容でも遠慮せず、
皆様の感想をお待ちしております。

#2「死神の発言は次元を超越する」(前書き)

どうもです。

先に謝つときます。駄文でゴメンなさい m (| (| m

#2「死神の発言は次元を超越する」

此処はある真っ白い空間。

何故か俺たち二人は気がつくところの空間にいた。

「どうも、死神です」

今回は、僕たちの設定について説明したいと思います」

俺がまた疑問を抱いていると、割とテンション高めに死神が宣言する。

「説明つて、何処の誰にするんだよ」

「もちろん読者様に決まってるでしょ」

「…次元超えてるぞ、お前の発言」

さも当たり前だと言わんばかりの顔で言う、死神のサラッと次元を超越した発言にツッコミが、

「仮にも僕は神なんだから、これ位朝飯前だよ」

更なる爆弾発言を繰り出す。

「…まあいい、それは置いてこつ」

で、何を説明すんだ？」

「君と僕的能力とか、容姿とかかな」

「そうか、じゃあ早速説明してくれ」

そう俺が言つと、眼を輝かせて速攻で説明を始める。

「では一つ目に、君の能力の説明をしまゝす」
名前は『フォール・ルール秩序崩壊』と言つて、世界の理を捻じ曲げ思つがままに操る力です」

「何か聞いてる分には凄そうだけど、分かりズライぞ」

「そゝだね、分かりやすく言つとゝ、まあ思つた事が全部現実になるつて事だよ。例えば、ある物の重さが百倍になると思えばそうなるし、粉々に碎け散ると思えばそうなる。」

「マジかよ…」

そんなチートみてえな事本当にできんのか？」

そんなクソチートな能力が使える事に疑いを向けると、死神が、

「もともと誰の力だと思つてんの？ この僕の力だよ？ 神なんだしなんでもできて当然だよ」

と、若干憤りの様な物を混じらせながら言つ。

「おい、“ 仮にも？ が抜けてるぞ」

何処からそんなに自信が溢れてくるのか、もつただの自慢の様な様になっている。

「あれ？ 忘れてたよ。」

あ、追加なんだけど、あんまりホイホイ使ったり、ちゃんと考えないと身を滅ぼす事になるよ。後世界のバランスとかも崩れて崩壊し
かねないから」

「お、おう、肝に銘じておく」

とてつもなく恐ろしい事を、こつ也容易く口にされると、あまり実
感が沸かない。

「よし、次は僕たちの容姿の解説に行つて見よう」

そして、死神はポンつと手を叩き、一気に話を次のコマへ進める。

「まず君、身長175cm、黒いボサボサとした髪に、虚ろな双眸
が特徴だよ」

俺の特徴を、何処か面倒くさ気に僅か数秒だけで語り終える死神。

「いやいや、虚ろな双眸ってなんだよ？ 輝いてるとまでは言わね
えけど、虚ろなんて言われる筋合いはねえぞ！」

「……輝いてないって認めてるんだ…何か、お気の毒に……」

俺がささやかな反論を見せると、死神は憐みに満ちた眼で俺を見下
してくる。

「…その眼ヤメやがらねえと決るぞ」

「こ、怖い事言わないでよ、謝るからさ」

若干引き気味に冷や汗を流し出して、距離をとりながら謝ってきた。

「じゃあ、次僕。身長178位、肩位までの純白でサラサラした美髪に、超イケメンの死神で〜す♪」

「お前、よくそこまで自画自賛できるな。ある意味賞賛に値するよ」

顔の横でピースサインを作り、テンションMAXでそう言い放つ死神に、”あははは…”と無機質な笑いとともな軽蔑の眼差しを送り付ける。

「あの、できればその目やめてくれない…？ 何か悲しくなってきたから…」

「後説明する事はねえのか？」

「無視？ ……まあ、もう無いかな。」

未だに例の眼差しを送り続ける俺に若干驚きながらも、一応質問には答える死神。

「わかった。ではこれで説明会はお開きだ。」

「え、もう？ まだ全然字数少ないよ？」

「てめえはその次元を超える発言をなんとかしろ！ イラねえことまでぶっちゃけやがって」

俺がパチンと指を鳴らすと、一瞬で全てが闇に包まれる。

（さて、今回はコレでお開きだ。次はちゃんと本編が始まるから安心してくれ）

#2「死神の発言は次元を超越する」(後書き)

まだ主人公の名前が出てませんね。
次回出るかな…？

感想等をお待ちしております。

#3「大事な事に限って結構忘れたりする」(前書き)

はいどうも、遅くなってすみませんm(_____)m

またまたまた駄文ですいませんorz

#3「大事な事に限って結構忘れたりする」

という訳で十五年の歳月が過ぎ、現在とある銀行に向かっている。

という訳ってどういう訳だ？ とツツコム人もいるだろうが、その所は気にしない方向でお願いしたい。というか気にしたら負けだ。それでも気になる人は、死神の力だとか適当に検討を付けてください。

「まだ着かないの？ 暇なんだけど」

だるい、と言いながら、隣を歩く死神は腕をだらしくぶら下げて、不満気な表情をしている。

ちなみに、死神の声や姿や声は、契約者である俺以外には見えないし聴こえないらしい。つたく、どこの死神だよ。

もしかしたら、某漫画の原作者様は俺と同じ様な境遇だったのかもしれん。

「もう少しだから我慢しろよ。あと外であんま話しかけんじゃねえよ、変な眼で見られんだよ」

こいつの姿は俺以外見えないのだから、はたから観れば一人でブツブツと話している危ない奴だ。

まあ、せめてもの救いは此処が学園都市だという事だ。テレパシーなんかを使える奴もいるからな。

そんなこんなで、見た目は高校生、中身は三十過ぎを誇る俺は、こ

の世界をエンジョイしているわけである。

しかし、何か大事なことを忘れている気がする。まあ、十何年も前の事だからどんな記憶が薄れてきてしまった。思い出せ俺っ？と念じた所でなんも思い出せない。我ながら情けない記憶力だ。

しばらく歩いていると、死神はもううだる様にダラけ、手が地面に着きかけている。さながらチンパンジーの様だ。

「お、見えてきたじゃん。あれ、あそこが目的地。だから頑張れ」
そっぴい俺が銀行を指差しながら、なんで俺がこいつを励まさなければならんだ、などと思っていると。

突如、銀行のシャッターが内側からの爆発で吹き飛ぶ。

「なっ？」

今日は例の銀行強盗事件が起こる日じゃねえか。やれやれ、すっかり忘れちまってたぜ。

状況を頭の中で理解し、落ち着きを取り戻した所で能力を解放する。

『第一章、我が身体に掛かる重力を全て無効とする』

トンツと地面を蹴るだけで俺の身体は空高く舞い上がる。

秩序を捻じ曲げ、俺の重力を皆無とした事で、僅かな力で事足りる。

「な〜んか、面白くなりそうだね」

先ほどと打って変わって、踊り出しそうなほど上機嫌な死神。こいつはこういうトラブルが大好きなのだ。

現場へ着くと、すでに白井黒子と思しき人物が犯行グループと抗戦している。

まあ、このまま放っておいても解決する事はわかってるんだけども、流石に女の子一人を戦わせておくなんて出来ない。俺はそういう人間である。それに他の理由もあるしな。

軽くジャンプし、犯人と白井の間に割り込む。

「ちょっとあなた、一般人は下がっていきなさいですよ」

「ああ、別に一般人ってわけじゃねえよ。ほれ」

そう言い、ポケットから風紀委員の紋章が入っているパスの様なものを見せる。

「ッ？ あなたフリーの風紀委員ですよ？」

「そういうこと」

そう、これがもう一つの理由。実は俺、風紀委員になりました、なんちつて。

あと、フリーの風紀委員ってのは、風紀委員の中から選ばれたエリート中のエリートがこの部署にも所属しないで、自由な活動を認められているものだ。自分でいうのもなんだが、今現在俺だけ。

これは死神の力とやらで、強引にこの世界にねじ込んだ。死神曰く、”もうこんな事するのヤダ” だそうだ。

もともとこんな制度なかったし、まあ、でも都合がいいからやって貰ったけど。

「俺たちのこと無視してんじゃねえよ？」

すっかり忘れていたが、犯行グループのリーダー格らしき人物が吠

える。

「悪いな。で、誰からかかってくるんだ？」

「舐めやがつて？」

そう叫び、一番大柄な男が俺に掴みかかろうとするが、素早く避け背後に回り、

『第二章、我が手に劔を』

刹那、俺の手に両刃の劔が現れ、男の首筋に刃が突きつけられる。

「動くな、死にたくなかったらな」

「…クソ」

あとは、パイロキネシストと無能力者だったな。

『第三章、我が分身を生成せよ』

一人を取り押さえているため、分身を作り出し攻撃を再開する。

「これでどうだ？」

パイロキネシストが掌に人の頭程の火球を生み出し、こちらに投げつけてくるが、

『第四章、水。水龍。の術』

俺の隣の地面から、巨大な水龍が飛び出し能力者に襲いかかり、この世界にとってはイレギュラーな忍術で火球ごと能力者を吹き飛ばす。

これは向こうの世界にいた時の知識を応用した技だ。知らない人は、ナ。トを読もう。

やっぱりレベル3程度じゃ相手にならないな。えーと、この後どうなんだっけ？

案の定、かすれ始めた記憶をたくり寄せても、あまり思い出せない。前を見据えると、すでにもう一人の犯人は逃亡を始めていた。

ああ、そうだ。車で逃げようとするんだったな、うんうん。

犯人が乗り込みヤケになったのか、なりふり構わず暴走した車がこちらに突っ込んでくる。

「車程度で俺から逃げられると思うなよ」

『第五章、か。はめ波』

「はああ？」

身体の前に突き出した掌から、青く太い閃光が一直線に放たれる。これはアレだ、国民的アニメのアレである。まあ、知らない人はいないだろう。

空を切り裂いた閃光は犯人の車に直撃し、爆音とともに大炎上。

「……やり過ぎだよね、あの人死んでないかな？」

今まで黙って戦闘を見届けていた死神がようやく口を開く。

「死んでねえだろ、きつと生きてるさ……多分、」

内心ドッキドキだ心臓が破ける。絶対にやりすぎだったし、その気になれば能力なんて使わなくても制圧できただろうし、すいません

調子に乗りました。

「無責任な」

「お前にだけは言われたくねえよ」

こんな不毛な独り言を繰り広げていると。不意に後ろから思わず聞き間違いかと思う様な言葉をかけられた。

「あんた、私と勝負しなさい！」

「はあ？」

#3「大事な事に限って結構忘れたりする」(後書き)

読んでくださって感謝感激雨あられ。

戦闘とか無理です、私の乏しい脳みそでは表現出来ない。

感想等大募集！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1668o/>

とある死神の秩序崩壊

2010年10月18日00時59分発行